

【巻頭言】 理事長・総長の憂うべき「暴走」

-----「考える会」代表・元副総長：芦田文夫

【編集後記】学園トップは“後出しジャンケン”で居直り・恫喝する裸の大将！

----- (M&H)

## ◆ ◆ ◆ ◆ ◆ 理事長・総長の憂うべき「暴走」 ◆ ◆ ◆ ◆ ◆

「立命館の民主主義を考える会 代表  
元副総長 芦田 文夫

### はじめに

いま、「茨木キャンパス」問題をめぐって、立命館学園には再び大きな亀裂が生まれつつあります。教授会や事務職場の多くと、理事長・総長など学園執行部との間の、深い断絶です。私たち元教職員が中心になり 3 年ほど前に「立命館の民主主義を考える会」をつくったのも、前理事長の専断的やり方のもとで教職員の不信と意欲の減退が極限に達していた時で、「全学一致」の主体的な土壌をとりもどさないと何の改革もなし得ないと憂慮したからでした。

### 1. 「教学の質の向上」への動きが全学に生まれつつあった

幸いにして 08 年秋頃から、これまでの改革の仕方について深刻な反省がなされるようになり、「学生・生徒・児童の成長」を軸に「教学の質の向上」とその担い手である「教職員の参画」（「理事長・総長の呼びかけ」ということが全学的な合意になって、「全学一致」の気風が蘇りつつありました。そして、「抽象的アイデアに過ぎる」という批判を受けながらも、新中期計画のための小委員会（第 2・教育、第 3・学生、第 4・研究、第 5・働き方）では各学部長理事が責任者になって、実態分析にもとづいた新たな政策化と学部・職場との往復論議が始まろうとしていました。教学部サイドでは、「今までとは違うやり方での教学政策」（教担理事交渉）、外延的拡大ではない内包的充実への努力がなされつつあるように見えました。

決定的だったのは本年 4 月の「新しい総長選挙規定」の成立でした。理事長主導の「選任」規定が、ふたたび教学中心で全構成員参加の「選挙」原則に戻されたからです。ただ、この原則転換の意義が肝心の現理事長・総長にどれほど深く理解されていたのか、それには心もとないところが残ってはいました。教学の位置づけの決定的な復権であるのに、「教学の最高責任者」であるはずの現総長がその改訂になら積極的なリーダーシップを発揮しなかったからです。それでいて「総長公選制を実現し学園民主主義を創造する会」や学部教授会が下から運動的に創りあげてきた案を、あっさり



“丸呑み”してしまったので、消化不良を恐れたのです。それに、旧規定に改悪した時の総長であった現理事長、そのもとで「選任」されてきた現総長には、過去の遺産の強い“呪縛”が心配されたのです。

### 2. 教学の内実から切り離された「キャンパス創造」

果たせるかな、その危惧は現実のものとなって、今年の夏に突如姿を現わしました。数百億円という莫大な蓄積資金を投資し、キャンパスを 3 分割（京都・滋賀・大阪）するという、これからの立命館のあり方を数十年にわたって左右するであろう「大プロジェクト」が「特別委員会」（川口総長が委員長）というところから「唐突に」提起されてきたのです。夏休みを挟んだわずか 2 ヶ月の間に教職員に態度決定が迫られ

ました。学生諸君が完全に居ない期間です。しかも、全学的に進みつつあった新中期計画の学的内容づけとは切り離されたものとしてでした。

これでは、「はじめに土地ありき」だけで、やり方もかつての「トップダウン」の事実上の再来ではないか、と多くの教職員から当然強い批判がまき起こりました。全学的に合意されつつあった内容と進め方とは、あまりにもかけ離れていたからです。教授会や事務職場から出されてきた意見は、「拙速」「性急」に過ぎる、新中期計画の学的内容との乖離、立命館全体のグランドデザインやキャンパスコンセプトがない、「衣笠狭隘化」の分析と総括の必要、学生の立場からする問題視点がきわめて弱い、事務体制・条件の裏付けが不分明、財政の具体的な見通しがない、全構成員による参加・参画の軽視、あるいは「(茨木) キャンパス」の利点だけに結びつけた情報操作、新総長選挙の直前に決めてしまおうとする不自然さ、などの点でほとんどの学部や職場で共通したものでした。これらはいずれも、新たな教学政策化のなかで「これまでとは違った」内容で創り出されていかなければならない課題とされていたものですから、当然の批判点でしょう。

### 3. 個別学部・部局の視点の先行は分断を大きくするだけ

今回の提起の仕方の大きな特徴は、全学的には「極めて短期間」と批判されながら、いくつかの学部へはすでに先行・潜行して総長による「肩叩き」がなされていたことです。これは



大きなキャンパス移転問題では絶対やってはならないことです。個別の学部・部局の「利害関心」の視点が先行すると、必ずその同じレベルで他の部分のそれが批判的に噴出し、「自分のところより他のところが…」といった無用な論戦で全学的には亀裂が深まるだけだからです。共通のベースを与えてくれるのは、教学の視点にたった全学的なグランドデザインの共有とその中での各キャンパスコンセプトの相互理解しかないでしょう。

そのことがまた、移転後の学教的連携をも真に発展させてくれるのです。その典型的な例を、理工学部の BKC 移転にさいして創りあげてきたのではなかったのでしょうか。だから本学では、他大学での幾多の苦い経験からの教訓も含めて、まず全学視点での教学を中心に据えた提起と論議を最優先に置く、ということが大原則にしてきたはずでした。

### 4. 学的内容よりも条件整備を先行させるという転倒

その提起の仕方の拙劣さは、しかしながらもっと大きな今回の「キャンパス創造」問題の基本的枠組みの置き方に根ざしたものであったことを知るので。「特別委員会検討報告」冒頭川口総長文書(9月22日)は、その特徴と同時にそれがもたらすジレンマを明瞭に物語っているように思われます。そこには、「学内容・教学展開」と「キャンパスを含む学条件整備」のいずれを先行させるべきか、議論があったが後者を先行させる進め方を取る、前者は今後全学で大いに議論していきたい、とする枠組みが置かれているのです。だから、上のグランドデザインやキャンパスコンセプトの内容は、まずは問われなくてもよいことになるわけです。

しかし、土地だけかという批判があるので、「キャンパス創造」の軸と並んで「人的体制の充実」の軸が謳われ、後者を掲げていることにもっと注目して欲しいと強調されています。ところがその中身はとなると、「学内容・教学展開」とは切り離して置かれているので「特別な学新展開や学教学のグランドデザインといったものを前提とせず、既存学教学の質的向上を目的とするもの」ということにならざるを得ません。だが他方では、すぐ続いて述べられているように「新たな学教学のありようを打ち立てる」可能性を拓くという新中期計画への本来的要請が全学的に課されています。この「既存学教学」に止めざるを得ないということと「新たな学教学」を目指さなければならないということとの矛盾ををどう整合的に解決していくのか。その真摯な


姿勢が欠けているので、「人的体制の充実」がその場しのぎの提案に終らざるを得なくなっているのです。

財政の見通しの具体化が迫られるにつれて、その間のジレンマが次第に現実に露になっていったのも当然でしょう。学部や職場からの「財政シミュレーション」に対する疑問や批判の基本は、既存の教学・業務の矛盾解決だけでなく、「今後の積極的な教学展開を、新キャンパスへの膨大な支出が、阻害するのではないか」というところにあるからです。それには、答えることが出来ないわけです。また、「既存教学の質的向上」と「教学新展開」とは、そんなに機械的に切り分けられるものではなく、実際には重なり合って出てくるのです。これらの批判に正面から応えるには、転倒した置き方を改めて、やはり「教学内容・教学展開」と具体的にかみ合わせていくより他にはないでしょう。

やっと出されてきた「財政試算」には、多くの「前提」や「仮定」が置かれています。そのほとんどが今後の教学政策いかに関るものであり、また規模問題や学費政策によって左右されるからです。それらが今後の検討として残されているのに、何故多くの仮説バリエーションの中から試算にある一つの係数が選択されたのか、それを問い詰め議論をすればするほど、結局は「茨木キャンパス」購入の“合理性”を論証したいとする意図だけが浮かび上がってくる、という論議の進行の構造になっています。「あと出し」の補足資料が追加される毎に、ますます「消極的な言い訳」の姿勢が目立ってきて、逆に「はじめに土地ありき」あるいは「はじめに総長選挙ありき」といわれた疑惑を強める結果に終わっているのではないのでしょうか。教職員がほんとうに望んでいるのは、積極的な高大な教学像のう

ち出しであり、それに向けて全構成員を惹き立てていくような、真摯な経営姿勢なのです。このような「大プロジェクト」にはそれが不可欠なのです。だが、それが出来ない転倒した枠組みを、最初から与えられていました。

## 5. 教学の人間主体がない「キャンパス砂漠」の愚

すでに、道理も大義も崩れていっているように見えます。それに、ほとんどの教授会と事務職場からこれほどの疑問と批判が噴出しているのに、この土地の器に誰が教学の中身を盛っていくというのでしょうか。どのような学部、どのような教学の内容、共通な外国語科目・教養科目・教職科目の置き方、キャンパス間の教学連携、学生生活・課外活動の保証…それらを具体化していく積極的な主体・人間をどこから見つけてこようとされるのでしょうか。私たち元教職員がいちばん恐れるのは、この先数十年にわたって、わが学園が内部に深刻な亀裂と断絶を抱えて空洞化したまま、ふたたび混迷と停滞を余儀なくされるであろうということなのです。理事長・総長・総務担当常務理事は、そこまでの責任をどうとろうと腹を決めているのでしょうか。

しかし、今からでも間に合う。転倒した置き方を改め、教学を主軸にした王道にたち返って、「人心一新」「全学一致」のもと新たな「教学創造」の内容づくりにきっぱりと踏み出そうではありませんか。そして、それを支えるための真の「キャンパス創造」を、学生・教職員全体の手で立派に成し遂げようではありませんか。現場には、その芽がすでに叢生しているのですから。



## 【編集後記】

学園トップは“後出しジャンケン”で居直り・恫喝する裸の大将！  
—「改革を改革する」とは「教学優先を土地取得優先する」ことだったのか？—



「考える会」ニュースNo. 27号(6月24日発行)の【編集後記】に、次のような指摘をしていました。

わが学園のトップは、辞任した「小 鳩コンビ」に良く似て、まことに情けない限りです。「満腔の反省」「全学協、業協の開催を呼びかける」は口先だけ、明確に間違いを認めず、なし崩しの改修作業（役員報酬制度、役員倫理規程）を急ぎ、「深草の長岡京移転」計画などを自画自賛し、R2020—中期計画(中間まとめ)を利用して、にわかに事前選挙活動か、と疑われかねない程、トップの写真を沢山載せた広報物を乱発。一方で常任理事会運営の多くを副総長にまかせ、次期理事長狙いか？これが最後と思っただけか？解りませんが、公費を使ってあちこちに顔を売り込み。他方で財政計画も示さず全学合意も抜きに、キャンパスの狭隘を口実に学部長を個別に誘導して、「川本時代」を超える拡張・移転計画に、もっぱら自己の「歴史的存在」を見出そうとしている、という批判の声も聞こえてきます。再度、教職員や学生の思いに立ち返り、学園ガバナンスの内実を検証しなければならないのではないのでしょうか。

その後、学園のトップは、夏休み直前の7月23日に配布した「特別委員会報告」の全学討議の進め方も、「新中期計画」(中間まとめ)の討議期間を延長しても、新キャンパスは「相手があるから」と、9月末集約・10月判断と期日を限り、茨木キャンパスで決着つけようとしています。そして情報の小出し、後出し、情報操作をして、しかもネタが底を割りそうになると、「こんな好条件の物件を全学論議の遅れで、買い損ねたら将来に禍根を残す。その責任を負えるのか」と、開き直って学部長理事等に恫喝に近い迫り方をしているようです。その上、理事以上にメンバーを制限した特別委員会で、「学部長理事制」＝「教学と経営の接点の統一」的運営から、学部長の意識を理事＝経営の問題に狭めて判断を迫っているとしたら、川本前理事長の猿真似です。また、総務担当常務理事でありながら、専務理事のごとく土地交渉を専断的に取り仕切る森島常務の行為は権限逸脱ではないでしょうか。

学園トップの動きと並行して、前総長・理事長室長の鈴木元氏が「考える会」や組合が把握していない問題を指摘していました。氏が配信した8月20日付けメール文書「学校法人立命館の理事ならびに関係者の皆さんへ」によれば、「森島常務理事等の提案者が長田理事長などに『優良物件として』進言したのは3月末以前の昨年の秋のことであり、まだ工事中のことであった。」<工事は、汚染土壌の撤去作業> 続けて、9月7日、27日付けで配信されたメール文書では、「問題になっているサッポロビール茨木工場跡地を志方部長・森島常務を通じて持ち込んだのも竹中工務店である。」と記述していました。

学園トップはゼネコン4社からの派遣職員を機関会議に諮らないまま受け入れしましたが、その会社の一つが竹中工務店です。そして教授会や常任理事会で承認されたのか、否か茨木市都市計画審議委員に立命の建山総合企画室長がなっています。もし一連の流れが事実とすれば癒着を疑われても仕方ないでしょう。

国・地方自治体が公共土木工事費を抑える中、学園トップはゼネコン＝竹中工務店の儲けのため、外資系に握られたサッポロビールの工場跡地(甲子園球場3個分以上)を買い取り、学生・院生・教職員との合意を抜きに、“学部名なきハコ物”建設に立命館の財政を丸投げしようとしているように見えます。

立命館が利用されかねない“将来に禍根を残す”買い物は中止させましょう。

早急に、全学構成員の力でこの疑惑の解明に迫りましょう！

以上

(M&H)

事務局連絡先：〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1 立命館大学教職員組合 気付  
「立命館の民主主義を考える会(元教職員)」

TEL:075-465-8200(宮澤気付) FAX:075-465-8201

メールアドレス [rits.democracy@gmail.com](mailto:rits.democracy@gmail.com)

バックナンバー掲載：ホームページアドレス <http://rits-democracy.blogspot.com/>